



吾祖と三階佛法

鹽田義遜

一

三階佛法とは三階教又は三階法ともいひ、隋の天台智顗（AD,538—597）と、同時代に出でた信行禪師（AD,540—597）に依つて、唱へられた所謂末法佛教の先驅である。三階佛法に就ては、先年學界を驚歎せしめた、矢吹博士の「三階教之研究」に餘蘊なく述べられて居るから、此には唯今の「吾祖と三階佛法」を述ぶるに當つて、必要なる三階教の概念を述べて、進んで吾祖との關係に及びたい。

信行の傳は隋の費長房（597）の「歷代三寶記」十二、並に唐の道宣（675）の「續高僧傳」十六等に收められ、近くは「三階教之研究」の最初に、「教祖信行禪師傳」並に「信行碑考」に詳である。信行は魏州衛國の人で、梁の大同六年（540）を以て生れ、隋の開皇十四年（594）正月四日五十五歳にして寂した。末法佛教の先驅者であつた。天台の智顗、淨影の慧遠、三論の嘉祥を始め、華嚴の杜順、淨土の

道綽、禪の慧可等孰れも同時代で、時恰も支那佛教の高潮時代に屬した。且つ我國佛教傳來の欽明帝十三年(542)は、信行十三歳の時であつた。

二

信行の誕生は、その母久しく子なき故に、之を佛に祈誓し、その結果信行を得たと傳へる。「續高僧傳」にはその幼時を述べて

性殊恒雅至四歲、路見牛車沒泥牽引、因悲泣不止要轉乃離……

生知平分不憚愛憎、八歲既臨、標據清敏懷慧奇拔(正藏50-559)

といへば、其の非凡なるを知るべく、長ずるに及んで、自ら具足戒を棄捨し、體驗を重ね親しく勞役を執り、大僧の下沙彌の上に居して、常に頭陀乞食し、日に止だ一食を執り、且つ法華の常不輕菩薩に法り、その路を行くに男女を問はず、老若貴賤を隔てず、禮拜讚歎したのであつた。ために時人その徳を慕ひ、歸依追隨するもの甚だ多かつた。これ寔に道宣が「高僧傳」に

及履道弘護識悟倫通、博涉經論情理遐舉。以時勘教、以病驗人。

蘊獨見之明、顯高蹈之跡、先舊義解翻對不同。(全上)

と記せる如く、彼は當時の佛教の常習を超越して、獨自の見地に立ちて、今や末法澆季の時となして民族的佛教在家佛教を鼓吹した。

佛滅千年後の信行をして、斯くあらしめたのは、實に彼が末法思想の確信に外ならなかつた。斯くて彼は遂に一切經中に於て、時機相應の佛教を主張し、「對根起行之法」三十余卷「三階佛法」四卷等を出して、一種の教外別傳と稱すべき、普法を唱へ、普眞の路を啓き、生盲の眼目を開き、五十五歳にして眞寂寺に於て入寂した。「續僧傳」五十四歳に作るも、碑文等に依て五十五と改むべきである。

三

彼に従へば摩耶經大集經等に依て、文當義當の判を以て、佛滅一千年以後を以て末法法滅とし、當時は一切の聖人、利根眞善正見の凡夫なく、唯破戒利根空有見の衆生のみなれば、佛教に於て三階の別を立て、就中第一第二階の一乘三乗の機でなく、當今末世の衆生は唯第三階の普法に依てのみ、解脱を得べしと主張した。

斯の如く三階佛法とは、第一階を一乗教、第二階を三乗教、第三階を普法又は普教といつて、是を教と時と處と人即ち機とに配して、第三階の普法を以て末法佛教としたのである。若し時に就て見れば佛後最初の五百年は一切大純の衆生、第二の五百年は一切坐禪の衆生、即ち佛後千年間は一切利根眞善正見成就の聖人の、佛教修行時代である。然るに千年以後は末法五濁で、聖人なく、一切空見有見破戒の衆生のみなる故に、第三階の普法に依らねば解脱はないのである。

若し處に就ても同様で、諸佛の淨土には第一階の一乗を説くべきも、穢土に於ては一乗に於て、三

乗と分別して説かねばならぬし、更に戒見まで破する穢土に於ては、第三階の普法に依らねばならぬ。又人即ち機に就ては、最上利根の人には、華嚴法華等の一乗教を説くべきも、若し利根正見の三乗の人には、第二階の三乗教を説き、正見戒見俱に破する、顛倒の衆生を第三階普法の機とするのである。

四

斯の如く時と處と人との上から見て、佛後千歳後の娑婆世界は、時は末法に屬し、處は穢土だから斷じて第一第二階の人なく、戒見俱破の惡業の衆生のみだから、第三階の普法ならざるべからずといふのが、三階佛法の根本主張である。

然らば第三階の普法とは何ぞといふに、普法とは普眞普正の佛法の意で、末法第三階の機は利根なるも戒見俱破の人であるから、一乗及び三乗の教に對して、高下淺深是非を論せず、普偏妥當即ち普眞普正の見をなすばかりでなく、諸の賢聖並に一切の凡夫に對して、勝劣優劣の見をなさぬをいふのである。即ち法華、華嚴、涅槃等の諸經は、第一第二階の正見具足の人に對すれば、別眞別正の教法で、正見具足の時處の人には、之を修行することに依て解脱を得るが、若し第三階邪見の人に於ては三乘一乗の偏執を生じ、愛憎の念を起して、三寶を毀損し、謗法の重罪を犯し、永く生死に沈淪する故に、我等末法穢土邪惡の人は、第三階の普法を以てのみ得脱すと説くのである。

顧ふに信行は所謂第三階の普法を唱へて、法華常不輕の轍を踏み一切の有情を禮拜し、自ら僧行を

捨て、非僧非沙彌非俗吾祖の所謂「忝居士（忘持經事^{六三}）」となつて、第三階の佛法を唱導したのであつた。故に當時その會下に集るもの三百余人、河東の裴玄證、化度寺の僧邑、北明寺の慧了、慈門寺の本濟、孝慈、慈悲寺の神肪等はその上首であつた。

五

翻つて當時の教界は、恰も南三北七等の諸家、各々その教判をかざして、蘭菊その美を競ひ、他義を貶し自流を褒め、徒らに形式に走り、彼此の是非を諍論するのみで、宗教的實踐の見るべきものは無かつた。此に於てか信行は、佛教の根本精神に立ち、時弊を救はんがために、普眞普正の普法を以て立つたのであつた。斯の如く信行の主張は、時弊を救済する所以の、真心に外ならなかつたが、三階教の興隆は、當時の三論、天台、華嚴等の教學と相容れず、ために政府並に一部の佛教徒より、屢々迫害を蒙り、信行寂後七年即ち開皇二十年（600）隋の文帝の禁斷を初めとして、武周の則天武后の兩度（695、699）の擯片、並に玄宗の禁斷（725）に遇つたが、孰れの宗教も有する如く、迫害に依て愈々教光を發揮し、民族的宗教として諸宗の間に、陰然たる勢力をなすに至つたのである。且つその末流は遠く唐宋初に及び、その史料に乏しいが、三百年乃至四百年の歴史を有するのである。

斯くて支那佛教史上、正しく三階教に對抗したものは、奇怪にも華嚴天台等の如き一乘宗ではなくて、その教義に於て、將又内容形式に於て最も類似した、淨土系統にありしことは、珍とするに價す

るのである。即ち慈恩の「西方要決」、懷感の「淨土群疑論」、道鏡の「念佛觀」等これである。就中懷感の「群疑論」は、逆謗取捨、三昧成不、普別正否、經道滅盡、念佛救不等の數十項に涉り、その攻撃微に入り細を穿てるもといふべきである。

六

信行は一乘隆盛の時に當つて、獨り諸經無益を主張せし故であらうか、當時の高僧中に於て、その毀譽の懸隔信行の如きは未だ見ぬのである。即ち碑文にはその德を讃して、「慈悲勝_ニ於釋迦_一、智慧過_ニ無量壽_一」といひ、又その教法を歎じては「優曇可_レ逢斯實觀_レ遇」と、尊信斯の如きあるかといへば、墮獄蛇身を以て誹議し、貶斥したのであつた。懷信の「自鏡錄」上に

神都福先寺僧某乙、於_ニ一時中_一忽然命終。遂於_ニ業道中_一見_下信行禪歸作_ニ大蛇身_一、遍身總是口_レ、又學_ニ三階人_一死者、入_ニ此蛇身口中_一莫_レ知去處_一。（正藏51—806）

とはそれである。

然れどもその遺教に就ては、唐の德宗貞元十一年（795）に、西明寺の圓照は奏して「碑表集」五卷を入藏し、尋で十六年には遂に勅して、「三階集錄」三十九部四十四卷を、大藏中に編入した。これ蓋し三階教の勢力、那邊にあるや知るべきである。斯くて此等の中現存せるは、「三階佛法」四卷。「明大乗無盡法藏」一巻の外、大英博物館に於けるスタイン蒐集の十四斷片。巴里國民博物館所藏のペリオ

蒐集の五斷片、此外京都の富岡家藏の一斷片等である。而して此等は全部、矢吹博士の「三階教之研究」の卷末に、「燉煌出土三階教殘卷」として載せられて居る。

七

上述の如く三階教は、早く隋時代に於て、末法佛教在家佛教を主張したもので、その思想内容並に形式の上に於て、勿論純雜難庵細の別はあれ、我鎌倉期に於ける末法佛教たる、淨土教並に吾祖の教義に對し、その類似点は蓋し二三には止らぬのである。就中その根本思想は、正像末三時の廢立である。その他人即ち機の判あるも、斯の如き約時約人を内容とする、第一第二階を正像の別法とし、第三階の末法は普法普教の佛教とするのである。

普別二法の思想に就ては、曾て道忠が「詳疑論探要記」六に

三階集錄の處々に普別二法を明すと雖も、文義幽隱にして是非地無く、唯須く普別の文を編綜して後昆に備ふべし。愚推の及ぶ所少々料簡を加へ、違を會すと雖も、量となすに足らず。(淨土宗全書六、二九七)

といへる如く、全く三階佛法獨特の用語であつて、その概念容易に把持し難きものがある。之に就ては「對根起行法」の斷片に、一切法盡を明す下、普想大乘法を説いて

莫問_レ外經內經、不作_レ高下心、爲_レ除_レ分別病_二故、普作_レ大乘解_一(三階教之研究、別錄一二二)

といふに見れば、且らく大乘の教に就ても、内外の分別も無用であれば、勝劣淺深の分別も不可である。

又その次下に歸一切法盡を明すに、内經に就て一に經卷法、二に極重惡法、三に世間之法、四に邪善佛法、五に十二種邪見成就衆生所歸法、六に十二種正見成就衆生所歸法、七に一切諸佛菩薩應說空見有見法、八に普想大乘法の八種を擧げて居る。是等の八種孰れに就ても、高下勝劣の分別をなさばこれ正像の別法であり、末法に普法に對して謗法を成するのである。

八

今更に進んで一乘三乘の佛法の上に於て普別二法を解せば、一乗の思想は普法に當り、三乗の思想は別法に當るのである。即ち普法とは一乘にまれ、三乘にまれ、各法當分に於て絶對價值を認め、他と相對して何等淺深高下を判せぬのである。之に對して別法とは、三乘當分に於ても、各々の別異勝劣を立て、又他の一乘に對しても一三の高下を判するの謂である。故に普法とは圓融相攝の意であり別法とは隔歷不融の意である。即ち普法とは一切の教法に對して、高下優劣を超越した、法華所謂開會思想に立ちての、諸法の絶對的價值批判をいひ。別法とは之に對して、相對的價值批判の謂である隨つて當時南三北七等の佛教敎判は、孰れも相對的價值批判の敎判で、普別二法を以て諸法を判する三階敎と相容れざるものである。

されば信行に隨へば、當時は末法普法の時なる故に、法華華嚴等の一乗教乃至淨土の念佛等は、孰れも相對教判に依る別法なる故に無益である。一法に執せざる對根起行即ち時機相應の普法のみ益ありて、餘は總て相對的別法なる故に、無益否謗法なりといふのである。

九

斯の如く普法に立ちて、別法を貶することは、他の末法佛教中淨土教に於て、法然が念佛一行を取つて、他を捨閑擲抛と判じ、吾祖が法華經以外の信仰を指して、謗法となすと頗る似たるものがある。然るに普法はこれ等と大にその趣を異にし、「教彌々實なれば位彌下り」といひ、「高山の水は幽谷を穿ち、最高の教は下機を救ふ」とは、普法以外の末法佛教の通格である。然り三階佛法は之に反し、

上好佛法（一乗等）不生_三於道_一、下惡佛法（普法）乃有_三道生_一（對根起行法、別錄一五二）

といへり。即ち末法は生盲衆生の下機なる故に、至極の教法を用ゆべきに、上好佛法の一乗等を以て無益といふは、末法は第三階の生盲衆生の故である。

信行は之を説明するに、好菜と肥料との譬を以てした。即ち好菜を取らんとして、金銀七寶の糞を以て肥料としても好菜は得られぬ。矢張屎糞の肥料にして、よく好菜を得と一般である、巧みなる説明を試みて居る。即ち末法生盲の衆生には、一乗三乗の別法は無用である。唯時機相應の普法のみを用ゆべしといふのである。

吾人は此に於て、吾祖の「四信五品鈔」に於ける、唱題の利益の問答を想ひ出さずには居られぬ。

問、不_レ知_二其義_一人、唯唱_二南無妙法蓮華經_一具_二解義功德_一否。

答、小兒含_レ乳不_レ知_二其味_一自然益_レ身、耆婆妙藥誰辨服_レ之_{（一五）}
_{（四二）}

といへるは、吾祖敎判に於ては法華獨一成佛を主張し、餘他の諸經を以て悉く謗法と判ずるも、末法一同の行法たる受持一行に至つては、乳の譬を以てせるは、敎判の意に矛盾するを覺わるのである。吾人は今の乳喩と肥料喩とを比して、普法と題目との間に、何等か超敎判の宗教的意味の、共通点のあることを見出すものである。

一〇

矢吹博士は「三階敎之研究」に於て、三階敎と吾宗とを比較して

唯三階敎は未だ、天台華嚴の敎理を知らず、密敎の事相を知らざりしかば、單に經文の羅列に終りしも、若し三階敎にして、天台の十界互具、壽量本佛、性具性惡の諸説を知らしめ、假に密敎曼荼羅の思想を加味して、試に普佛曼荼羅を描かしめんか、畧十界勸請の曼荼羅に、髣髴たるものたりしは、蓋し想像に難からず。（五八七）

この記事を見ずとも、吾が宗徒として誰がその形式上に於ける共通点のみならず、不輕繼紹の事實に於て、諸宗迫害の歴史に於て、相類似せるに驚かずに居られよう。併し六萬九千三百八十四字よりな

る、法華の一部八卷は五字七字の題目に結歸するまでには、二千數百年の思想史の内容がある。此の内容たる思想史の研究が、吾祖敎學の全背景である。されば宗學の完全な結論は、その内容を明瞭にするに非ざれば恐らく不可能である。

斯る見地に立つた時、吾人は望洋の感に打たるゝが、何といつても宗學の根本思想は、法華經に據つた天台思想であり、五綱敎判はその思想的源を三階敎に認め、この内面的發達と、題目の行相とは之を淨土敎に見、若し行門たる三秘の展開に至つては、眞言密敎の三密を離れては、その行相は勘えられぬ。即ち三秘展開に對して、眞言密敎の洗禮を認めし以上、吾人は慈覺智證安然等の、所謂獅子身中の虫も亦、宗學展開への思想史から見れば、善知識といはねばならぬ。併し乍ら斯く大成された吾祖の力は、實に内相承の佛智でなくてなんであらう。

一一

更に進んで吾祖の觀た三階敎は果して如何といふに、信行が普法以外の佛法を以て、悉く別法とし謗法としたのと逆の筆法を以て、法華に對して三階禪師を以て、謗法の徒としたとは、吾祖の三階佛法觀である。

吾祖の遺文中三階敎に關する記事は、概ね左の諸鈔である。

(一)「聖愚問答鈔」三五六

文永二年

(一)「撰時鈔」三七

建治元年

(二)「下山御消息」一五五

建治三年

(四)「曾谷二郎入道殿御報」三六〇

弘安四年

此等中(一)以外は孰れも佐後の御書である。(一)も文永二年とするは、「日明目錄」の説で、「境妙庵目錄」は弘安四年とするし、且つ本鈔は日持聖人の筆に成つたものといへば、矢張佐後と見てよからう。さうすれば吾祖の三階敎の破折は大体佐後といはねばならぬ。

今右四鈔に就て見るに、共通の批判は謗法の一句に盡きるが、就中(一)(二)(三)の三鈔は共に「大蛇となり」と述べて居る。由來吾祖は「下山鈔」に「禪宗の三階信行禪師……」といへる如く、三階佛法を以て禪宗の一派と見られた様である。これ三階が普法を立てたからであるが、普法とは一乗三乗に非らざる、普眞普正の佛法といふ故に、一定の經典は認めぬから、此点から見れば勿論禪宗ではないが、禪の敎外別傳と彷彿たる敎である。此点を以て吾祖は禪宗に接したのであらうが、これは三階の敎書は幾多の迫害に依て、敎法と共に煙滅したことに起因するのである。爲に「朝鈔」一九四「健鈔」六(五九)の如きは、信行寂後五十八年に寂した、禪の第六祖通信禪師と誤るに至つたのである。

此外(二)(三)は普別の二法に就て謗法と述べ、(三)(四)は淨土敎の道綽善導法然と共に、入阿鼻獄の人と判じて居るが、此点から見れば禪宗に接しつつも、尙ほ淨土敎と同じく、末法佛敎として

取扱はれたことが明白である。

一一

今(二)(三)に就て吾祖の三階佛教觀を見るに、(三)の「下山鈔」には

禪宗の三階信行禪師は、法華等の一代聖教をば別教と下たず。我が作れる經をば普經と崇重せし故に四依の大士の如くなりしかども、法華經の持者の優婆夷にせめられてこゑを失ひ、現身に大蛇となり、數十人の弟子を吞み食ふ。……無間地獄はまぬがれがたし。(一五)

と述べて、「撰時鈔」には

漢土の三階禪師の云く、教主釋尊の法華經は、第一第二階の正像の法門なり。末代のためには我がつくれる普經なり、法華經を今の世に行せん者は、十方の大阿鼻獄に墮つべし。末代の根機にあらざるゆへなりと申して、六時の禮讚、四時の坐禪、生身佛のごとなりしかば、人多く尊みて弟子萬餘人ありしかども、わづかの少女の法華經をよみしにせめられて、當座には音を失ひ後には大蛇となりて、そこばくの檀那弟子並に少女處女等をのみ食ひしなり。今の善導法然等の千中無一の惡義もこれにて候なり。(二七)

と述べて居るが、以上兩鈔の意に依るに信行は、法華等の一乘教を以て第一第二階の別法、正像の法門を貶し、且つ末法は普法の時なれば、末法の法華經の行者は無間地獄と、逆の法門を述べた故に、

却て法華經の行者の少女に責められて、當座に音を失ひ、現身に大蛇となり、弟子檀那を食ひ遂に無間地獄に落ちたといふのである。

吾祖の法華一部末法爲正の説と、今の信行の説とは正反對である。

一三

此の記事は正しく、唐の懷信の『釋門自鏡錄』上の「唐裏州神足寺慧眺謗三論拔舌三尺事」の下に附せる、孝慈、神昉、信行の三階諸禪師の傳中、孝慈、信行、師資の傳意を取つて述べられたものである。即ち孝慈傳に

一時在岐州說三階佛法、于時有優婆夷持法華經、又勸有緣、其禪師言、汝持法華經、不當根機、合入地獄、優婆夷情中不忍、發願之時其禪師被神打、失音不語云々（正藏51—806）
畧引、法華傳記九引同文（51—92）

の文と、前引信行大蛇となるとの意を以て記されたものである。

更に謗法蛇身となることは譬喩品の偈に十四謗法を説いて、「若人不信、毀謗此經……其人命終入阿鼻獄」と述べ。更に重謗法に就て「更受蟒身、其形長大、五百由旬、……謗斯經故、獲罪如是」と説ける文意に依て述べられたことは明かである。且つ吾祖の信行大蛇の記述も三鈔皆少異がある。即ち『下山鈔』は「こゑを失ひ現身に大蛇となり」といひ、『撰時鈔』は「當座には音を失、後

には大蛇となり」といひ、『聖愚問答鈔』は「大慢は生れながら無間に入り、三階は死して大蛇となる」といふが、これは同一事實を述ぶるに當つて、他の謗法諸宗の組合せから來た様である。得ち『下山鈔』は眞言禪念佛の三宗に附し、『撰時鈔』は善導法然の念佛に附し、『聖愚問答鈔』は月氏の大慢婆羅門に附した故である。

下山鈔 現身大蛇——眞言禪念佛の三宗

撰時鈔 後到大蛇——善導法然の念佛 無間

問答鈔 死後大蛇——大慢婆羅門

右に見て明なる如く、信行の謗法に就て現未の二時に於ける時間的の相違は、自ら謗法の淺深を現すもので、吾祖の謗法觀は眞言最も深く、念佛之に次ぎ、外道又之に次ぐ故である。而して若し破折に於ては、淺より深きに及び、佐前未破兩家眞言といふ如く、佐前念佛佐後眞言の次第あるに見て、いよく明かである。

一四

上述の意を最も明かにするものは、信行に就て最後に述べた『曾谷二郎入道殿御報』の記事である即ち右に依れば、譬喩品の「其人命終、入阿鼻獄」の文を出して、經文に所謂「其人とは何等の人を指すや」の問に對して

其人者指_二此等人人_一也。彼震旦國天台大師者指_二南北十師等_一也。此日本國傳教大師者定_二三六宗_一(南都)人人_一也。今日蓮指_二弘法慈覺智證等三大師_一。並三階道綽善導等云_二其人_一也。(五二〇)

と述べられたのを見るに、天台傳教日蓮と正しく、法華外相承の師の上に就て之を判じ。天台に對しては南三北七、傳教に對しては南都六宗が謗法墮獄の人である。而して吾祖に對しては、先づ謗法の深きより擧ぐれば、東密の弘法、台密の慈覺智證の所謂兩家眞言の三大師。之に次ぐが支那に於ける三階道綽善導の三師である。且く三階を禪と見れば、先づ眞言之に次ぐが禪念佛とせられたのである。而して後の三師は佐前對破に當り、先の三大師は佐後の對破に當るのである。

今の『曾谷鈔』の意を以て、先の三鈔を見れば信行大蛇の記述に、淺深與奪のある所以自らずべきであらう。若し三階佛法を評せし、吾祖の記事が孰れも佐後にあることは、勿論三階佛法を禪の一派と見た、法門の内容より考へ得るも、禪宗破は佐前の通格なれば、吾祖は且らく三階を禪に接したが、その法義の内容に於て禪淨土に勝れる、一種の末法佛教と解せられたからであらう。

一五

若し右の破折の次第に就ては、『撰時鈔』一鈔に就て見るに最も明了であつて、彼鈔上卷に於て三國佛教の展開を述べ終つて

先づ三つの大事あり……此の三つのわざはひと、所謂念佛宗と禪と眞言宗となり、一には念佛宗

は日本國に充滿して四衆の口遊とす。二に禪宗は三衣一鉢の大慢の比丘四海に充滿して、一天の明導とをもへり。三に眞言宗は又彼等の二宗にはにるべきもなし。(一七)

と述べ、下卷に三宗を破折し、最初に念佛を破し、その最後に於て三階佛法を破し、

此等の三つの大事はすでに久くなり……これより百千萬億倍信じがたき、最大の惡事はんべり(一八)とて台密の慈覺等に及び、

日蓮は眞言禪宗淨土等の元祖を三虫となづく、又天台宗の慈覺安然慧心等は、法華經傳教大師の獅子の身の中の三虫なり(一九)

と判じ、所謂三度の高名を述べて。

此の三つの大事は日蓮が申したるにはあらず、只偏に釋迦如來の御神、我身にのりかわせ給ひけるにや、我身ながらも悦び身にあまる。法華經の一念三千と申す、大事の法門はこれなり。(二〇)と結ばれたのを見て、吾祖一代の破折の次第は明了である。

上來吾祖の三階佛法觀に就て述べたが、最後三階佛法と吾宗との關係に就ては、宗教的立場から、將又佛教史上から、更に幾多の内容的研究を要すると信ずるものである。

因に御遺文末註中三階佛法に關せし箇所は左の如し。

一、健鈔 六_{五五}(三五)

一、啓蒙 一二_{一六}(七九) 二一〇_{五八}(八四) 三二一_{四三}

一、圓註 七_{二三}(上_{三八〇})

一、拾遺 二_{二五}(六三)

一、考文 一_{二五}(四二)

一、充裕園全集 二_{四一七}

一、本化聖典大辭林 二_{一五} 三_{二七}

(三、九、一一稿)

